The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ ゲーム読み物

ソニックの大冒険

消えたニッキ

バッシャ～ン！

ニッキがおっこちた岸壁の向こうに、大きな大きな波柱が上がりました。

それは、ニッキが海に落ちただけでは、とてもそんなには上がらない、っていうくらいの大きな波柱です。

じつはじつは、この時！

ニッキの身に、「信じられなぁ～い！」っていうことが起こっていたんだけど。

とにかく今は、おっきな波柱が立ったことで、「ちょっと、フシギだなぁ？」なんて、だ～れも考えてる余裕はありません。

「あ～ん、お兄ちゃ～ん！」

タニアとリトル・ジョンが、今にも泣き出しそうに、岸壁から海をのぞきこみました。

波は、もうすでに、もとのおだやかさを取りもどしています。でも、ニッキの姿はどこにも見ることができません。

「お、お兄ちゃん――――！」

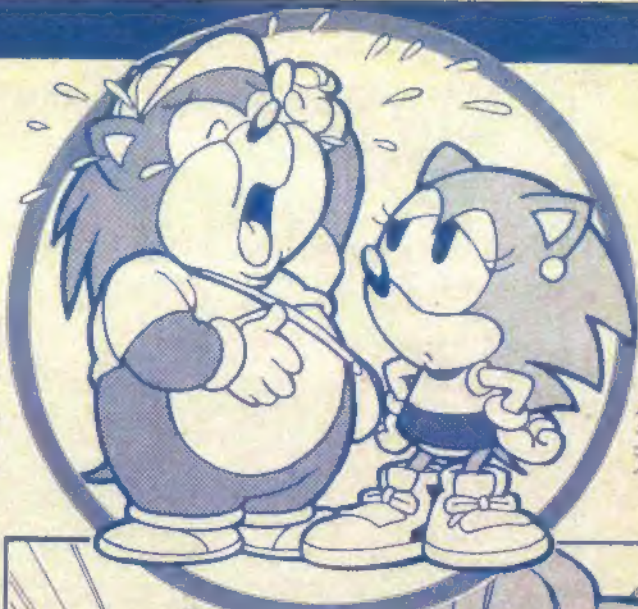
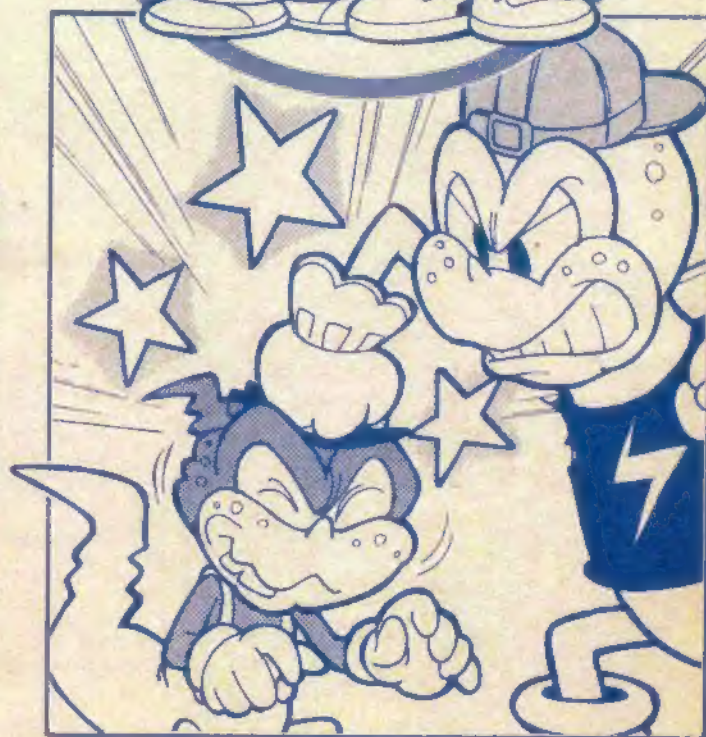
思わず、ゴクンと息を飲み込んだタニアのとなりで、ズズッ・・・！ リトル・ジョンが、鼻をすすりだしました。

目には、大つぶの涙を浮かべています。

「ううう……、ニッキ。いいヤツだったのにな。学校のランチの時だって、いつもボクに自分のおかずを分けてくれた。……ううう、それに、ニッキのママの作るアップルパイは

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

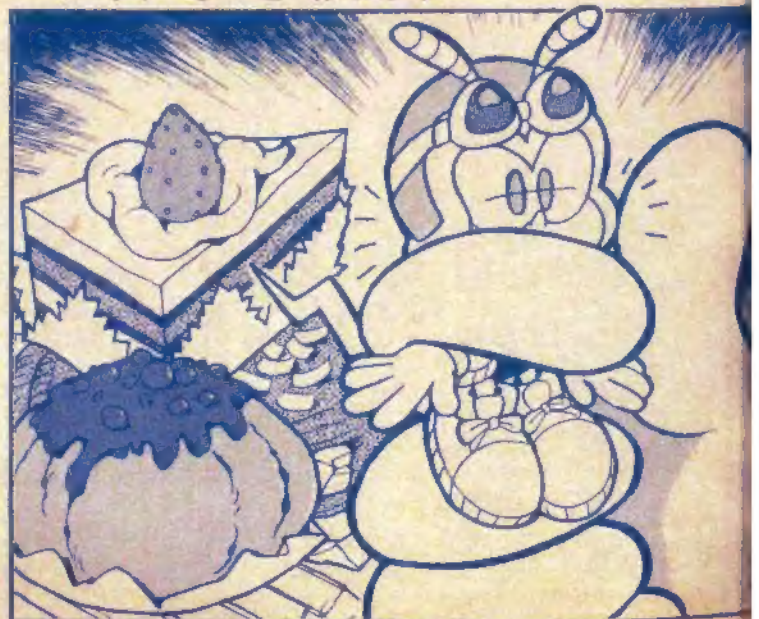
©1991 SEGA

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

サイコーだったのに。」
「ちょっとちょっと、リトル・ジョン！」
「なんだい、タニア。ボク、今悲しいくらいに、お腹がすいちゃったんだ。」
「あのねえ、お兄ちゃんがまだ死んじゃったかどうか分かんないでしょ！」
リトル・ジョンは、ニッキが死んで悲しいのか、それともお腹がすいたんで悲しいんだか、まったくよく分かりません。
「まったく、も〜！」
タニアは、そんなリトル・ジョンにかまうのをやめて、タッタとがけを下りはじめました。
「お、おいおい、タニア。何するつもりだい？」
「きまってるじゃない！ お兄ちゃんをさがすの！ 乗ってきたボートで、海に出るのよ。」
それは、名案です。
海に落ちたニッキが、波に流されているのかもしれません。
リトル・ジョンも、あわててタニアのあとを追い出しました。
「あわわわ・・・、に、兄ちゃん、どうしよう。」
ニッキが海に落ちたことで、大あわてなのは、タニアたちだけではありません。ベルーカ・ブラザースの四つ子も、それにアントンもちょっとビビッています。
「グスッ・・・。もしかして、ボクたち……。」
気の弱いトッドが、もうすでに半ベソをかいています。
「殺人罪で、……おまわりさんに捕まっちゃうのかなぁ！」
「バ、バ、バッカ言うんじゃないぜ、トッド！」
アントンが、トッドの頭をゴツンとやってにらみました。
「ニ、ニ、ニッキのヤツは、自分でかってにおっこちやがったんだ。オ、オ、オレたちに責任はねぇ〜さ。ダハッ、ダッハ、ダハハハハ〜！」
そう言って、アントンは、けんめいに笑ってみせましたが、ホッペタのあたりがヒクヒクと引きつっています。
その時、
「アントン兄ちゃん。キャラメル・トイ王国の小舟が近付いてくるわよ！」
沖のほうを見ていたミグ〜が、声をあげました。
そうです。沖に停泊している帆船からは、何そうもの小さな小舟が、この島に向かってくるところだったのです。
小舟には、王国の兵隊がのっています。

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館 2021/7/27

背中には、バズーカ砲のような大きな銃。
もちろん、ベルーカ・ブラザーズが集めたオモチャやお菓子を、だれにも横取りされないように見張るためです。
「おっと、こうしちゃいられねぇ。みんな、急げ！」
アントンは、前もって用意しておいたケーブルカーに、オモチャたちをのせ始めました。
まぁ、このケーブルカーというのは、それほど立派なものではありません。
ロープを、がけの上から船の着く入江までピ～ンと張り、それに何台もの大きな運搬用の箱をくっつけたというものです。
「だぁ～ははは、どうだどうだ。兄ちゃんの考えたケーブルカーはすっげ～だろ～！」
ケーブルカーが、次つぎにおもちゃたちを入江に降ろしだすと、アントンたちは、ニッキのことなど忘れて、キャッキャッとはしゃぎだしました。
「ちっ、いい気なもんだぜ。」
今まで、こっそりとアントンたちを見ていたチャミーが、こうつぶやきました。
「くっそ～、オリ様のハリさえ、こんなふうにひん曲がってなけりゃあ。あいつらなんか、ちょちょいのちょいとやっつけてやるんだがよぉ。」
チャミーは、曲がってしまったハリをうらめしく見つめました。
海に消えたニッキのことを思うと、なんとかして、アントンたちをギャフンと言わせたかったのです。
知りあったばかりの、ニッキ。でも、いつもひとりぼっちで生きてきたチャミーには、なんだか、ずっ～と昔からの友達に思えてしようがなかったのでした。
さぁ、こんなふうに自分の思いどおりにならない事態になると、すぐ短気を起こすのがチャーミー・ビー。
「チクショウ！ チクショ～ウ！ ハリさえ、もとにもどればよ～！ グヤジイ～！」
イライラ……、それからムカムカァ～っていう気分にまかせて、かくれていたお菓子の山の上でジタバタと暴れだしました。
すると、
「おい、ちび———。」
そう呼ぶ声がしました。

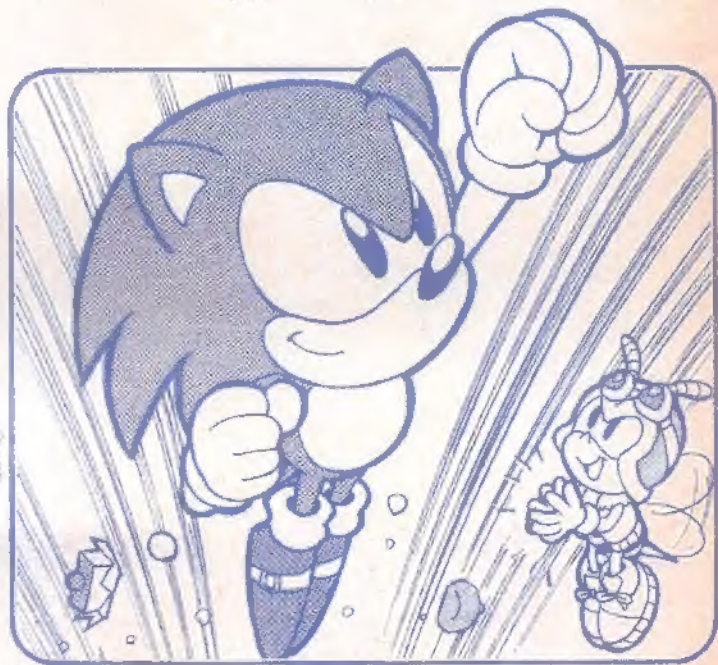
ソニック、ついに登場

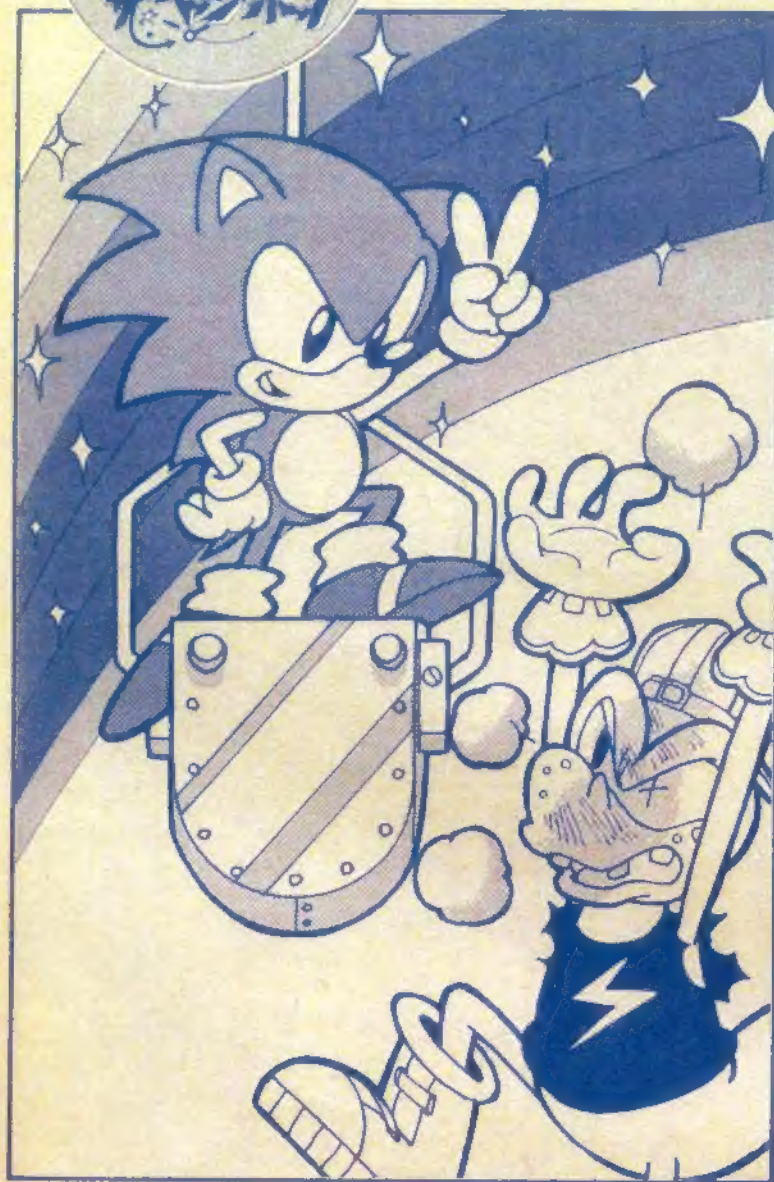
「あん？ チ、チビだとう？」
ほこり高きチャーミー・ビーにとって、「チビ」と呼ばれるのは、「ハエ」と間違われる以上にクツジョク的なことです。
「だ、だ、だれだ～！ オ、オリのいっちゃん気にしてることを言いやがったのはぁ～！」
アントンたちがいるのもかまわず、大声を上げました。

チャーミー・ビー(チャミー)

でも、次のしゅん間、ムンズ……！ チャミーの口は白い手袋をはめた者の手でふさがれていたのでした。
「ううう・・・、○☆△口～！」
この「○☆△口」というのは、「マルホシサンカクシカク～！」と叫んだということではありません。口をふさがれたため、モグモグと言葉にならなかったという意味です。
チャミーの口をふさいだ者が、言いました。
「ハリを直してやるのは、いいが。オレのじゃまにならね～ようにしてくれよ！」
「ヘッ？」

これまでのストーリー
ニッキと妹のタニア、友人のリトル・ジョンは、モーターボートでホッグホッグ島に乗り上げてしまった。三人は島の洞くつでハチのチャーミーに出会い、宝物を見せられた。宝物はベルーカ一味が悪のキャラメル・トイ王国に売るためのものだった。つかまった三人が逃げ出す途中、ニッキはがけから落ちて……。

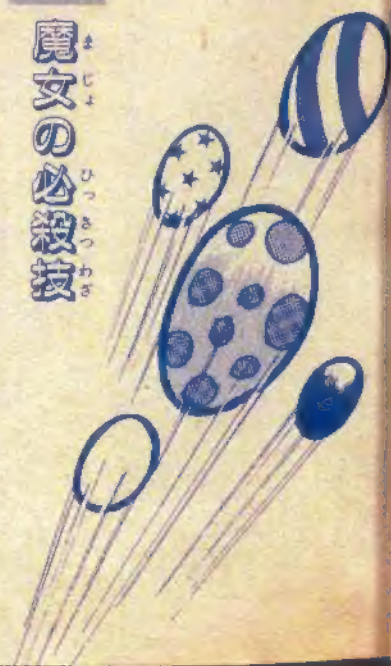
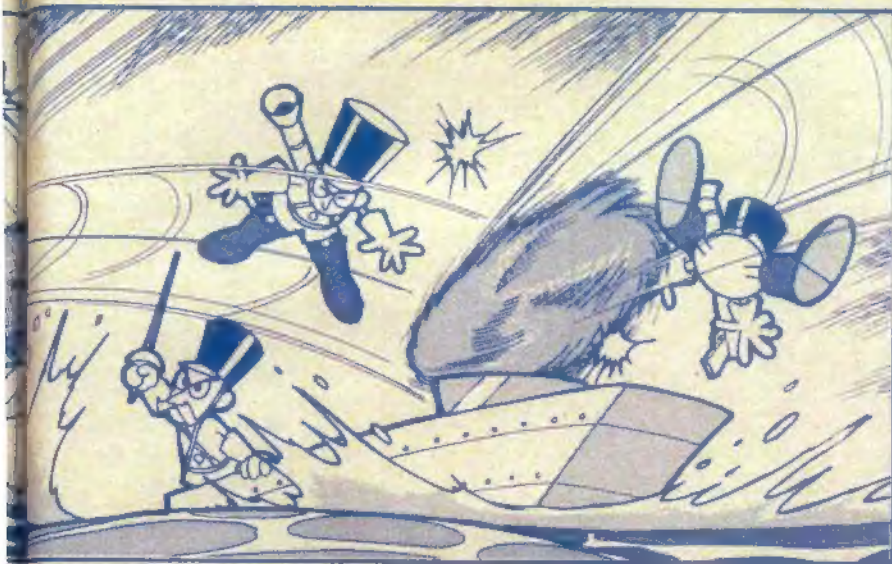
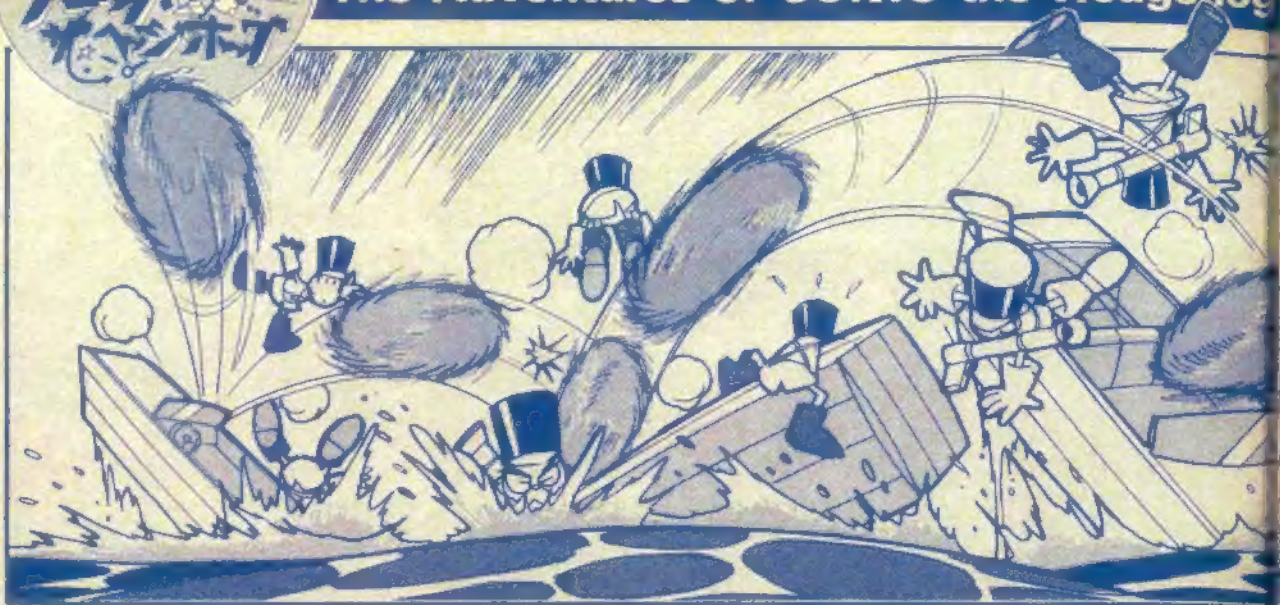
著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館 2021/7/27

チャミーは、なんのことか分からず、目をオバQのように見開きました。
そして、クイクイクイ・・・。
白い手袋の者が、チャミーの曲がったハリを、かんたんにもとにもどしてくれました。
チャミーの目は、今度は点になりました。
まったく、チャミーの目は、オバQから点までコロコロとよく変わります。
その時、パシュ／
お菓子の山の中から、白い手袋の者が空高く舞い上がったのでした。
「のはぁ〜？」
チャミーが、ビックリして声をあげます。
そして、思わずこう叫んでいたのでした。
「ニッキ／」
でも、……すぐに。
「……じゃないか／」
と、言い直しました。
チャミーが、今とつじょ現れた者をニッキと間違えたのもムリありません。
それは、ニッキとソックリの青いハリネズミの少年でした。
でも、ニッキと違って、メガネはナシ。
そのかわり、目はツッパッた感じでスルドク。
それに、年もニッキより三つ四つ上でした。
そしてそして、ニッキとなにより違っていたのは、その超人的な速さ／
ものすっごく、す早いのです。

「お〜りゃあぁあ〜／この悪党どもがぁ〜／」
ハリネズミの少年は、そう叫ぶと、目にも止まらないスピードで、あっというまにお菓子の山をくずしてしまったのでした。
「あわわわ〜、こ、こいつ、いったいナニモノだぁ〜／」
あわてたのは、ベルーカ・ブラザース。
とつぜん現れた敵に、アントンがだっとおそいかかっていきました。
ビュンビュンビュン／
四つ子の武器は、パチンコです。マッド、ハッド、トッド、ミグ〜が、アントン兄ちゃんを助けようと、いっせいにハリネズミの少年に向かって小石をはなちます。

でも、だいじょうぶ。
ニッキとよく似た少年は、シュンシュンシュン／ とその石をかわすと、おそってくるアントンめがけて、一気に攻撃を開始したのでした。
しかも、その攻撃技っていうのが、スゴイ／
体をクルクルと回転させて、相手に体当りするのです。
「ローリング・アタァ〜ク／」
グワッシャ／
少年の必殺技が、みごとアントンの顔にさくれつ。あわれアントンの顔は、ペコ〜ンとへっこんでしまいました。
「お、おま……ひは、なひ……もの？（お前は何者？ と言っている／）」
ペコ〜ンとなった顔のままのアントンが、ナサケナイ声で言いました。
すると、ハリネズミの少年が、スタッ／ とケーブルカーの上に飛び降りて、カッコをつけてこう名のったのでした。
「オレか？ ……オレの名は、光速を超えたニクイやつ、ソニック・ザ・ヘッジホッグってんだ／」
そして、テレビのヒーロー物の主人公のように、カッコよくポーズをつけ直すと、
「ドッカ〜ン／」
と言って、体から虹のように光の帯をはなちました。
まぁ、そのハデなことハデなこと。

思わず、
「ちょっとちょっと、ナニよあれ？」
海の上でニッキをさがしていたタニアが、ビックリして叫んでしまうほどでした。
それに、超スピードに命をかけた八チ、チャーミー・ビーにおいては、もう感激も感激。
ただひたすら、そのスピードとハデさに、
「スゲ～スゲ～スゲ～！」
を連発するばかりです。
さぁ、それからはもう、タイヘンです。
ソニックは、必殺技ローリング・アタックで次つぎにベルーカ・ブラザースをやっつけていきました。
そうなると、キャラメル・トイ王国の船もだまってはいません。
ドッコ～ン、ドッコ～ン！
大量のお菓子とオモチャを手に入れるために、いっせいにソニックめがけて大砲を撃ってきました。
島に近付いた何そうもの小舟からも、兵士たちがバズーカ砲のような銃で攻撃してきます。
「キャ～！　助けて～！」
「殺されるぅ～！」

魔女の必殺技

ボートの上のタニアとリトル・ジョンが、悲鳴をあげます。
それもそのはず、二人の上にも銃弾がどどっと降ってきたからでした。
そして、ベシャ！
一発の銃弾（？）が、みごとリトル・ジョンの頭に命中しました。
「ぎゃぁ～！　死ぬ～死ぬ～！　死ぬ前に、ハンバーガー十個とフライドチキン二十本と……そんでもって、アップルパイ六つとそれからそれから……。」
「ちょっとちょっと、リトル・ジョン！」
「あ～、もっともっと食べてから死にたかったよ～！　タニア、サヨナラ！」
バタン！
さんざん叫ぶと、ボートの底に倒れ込みました。
でも、タニアがあきれた感じに言いました。
「ねえ、リトル・ジョン。チョコレート・クリームで死ねるなら、こんなハッピーなこと

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

ないじゃない?」
「ンにゃ?」
死んだハズのリトル・ジョンが、パチリと目を開けました。
そうです、カレが顔にまともに受けた銃弾(?)っていうのは、実は、チョコ爆弾だったのです。
「キャラメル・トイ王国っていうのは、武器からなにまで、み~んなお菓子だったのね!」
それからというもの、
「うわ~い、こっちこっち! ボクのこと撃っておくれ~!」
リトル・ジョンは、兵士たちに手をあげて、自分から進んで銃弾を浴びたのでした。
「へっ、このソニック様相手に、そんなヘナチョコ爆弾が通じると思ってるのか!」
さぁ、ソニックの反撃です。
「ローリング・アタァ~ック!」
シュンシュンシュン! と体を回転させると、次つぎに小さな舟を倒していきました。
そしてついに、キャラメル・トイ王国の王子と王女の乗る帆船に飛び乗りました。
「ぎゃ~、スゲ~ぜよスゲ~ぜよスゲ~ぜよ~!」
チャミーは、もうすっかり大喜び。
ソニックといっしょになって、船に乗り込むと、自慢のハリで兵士たちをブスブス刺しまくり始めました。
チャリ~ン!
ソニックが、兵士から剣をうばいます。そして、まるでピーターパンみたいに、剣で兵士たちと格闘を始めたのでした。
その剣さばきの、鮮やかなこと!
さてさて、この光速を超えたニクイ奴、いったいぜんたい何者なんでしょう?
それに、みんな戦いに夢中になって、ニッキが消えちゃったことなど、まるで気にしていないようです。
でも、実は実は、ニッキが消えちゃったことと、ソニックが登場したことは、とっても深い関係があったのでした。
「それ! お前たちだな、世界中のオモチャとお菓子を独り占めにしようとしている王子と王女は!」
ソニックは、ついに船の先端に二人を追いつめると、剣を突き立てました。
でも、よく見ると、
「あん?」
王子と王女が、まるで生気のない生き物のように、ただボ~っと笑っていることに気付いたのです。
それに、よく見れば、カレを取り囲む兵士たちにしても同じです。
さすがのソニックも、思わずつぶやきまし

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館 2021/7/27

た。
「ちょっと、オタクたち、かなりクライんじゃない?」
と、その時です。
ドドドドド〜ッ! 船の先端から、打ち上げ花火のような光のエネルギーが、立ち上りました。
「な、なんだなんだ?」
驚くソニックに、「ひぃぃ!」とチャミーがしがみ付きます。
するとどうでしょう!
光の中から、恐ろしい魔法使いの女が浮かび上がったのでした。
「ぎゃぁぁぁ〜! で、出た出た出たぁ〜!
ソニックのアニキ、魔女だべさぁ〜!」
チャミーが、悲鳴をあげます。

「こ、こいつが、みんなをあやつっていたんだな!」
魔女は、憎にくしげにソニックをにらみつけると、どなるように言いました。
「ソニック・ザ・ヘッジホッグ! よくも、このアタシの計画をじゃましてくれたね!」
そして、
「これを、受けるがいい〜!」
ソニックに向かって、すさまじい魔力をはなったのでした。
「うわ〜!」
まさに、いっしゅんのことでした。ソニックが、その魔力をかわす間もありません。
魔力をまともに食らったソニックの体は、みるみるうちに凍っていったのでした。

つづく

いきなりピンチのソニック! このまま魔女に負けてしまうのか!!

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館 2021/7/27